

剰余価値説の成立過程（二）

松 田 弘 三

三

経済学を一つのブルジョア科学たらしめた「古典経済学は階級闘争が未発展な時期のものである。」このような地盤のうえに、アダム・スミスおよびリカードは、おそれるところなく、ブルジョアの経済体制の内的連関を曝露することができた。しかるに産業革命の完成、大工業を基礎とする資本主義社会の確立とともに、ブルジョアジーとプロレタリアートとの階級対立が明瞭になってきた。とくにイギリスおよびフランスにおけるブルジョアジーの政治的権力の獲得「以来、階級闘争が実践のおよび理論的に、ますます公然かつ威嚇的な形態をとった。それは科学的ブルジョア経済学の葬鐘を鳴らした。」¹⁾いまや、経済学はブルジョアの立場に立つかぎり、俗流化し、弁護論的なものに転落せざるをえなくなった。

この古典経済学から俗流経済学への決定的転換期は一八三〇年代であるが、このブルジョア経済学にたいする、プロレタリア的批判は、すでにそれ以前に、古典経済学の最高の発展段階であるリカード経済学にひきつづいて、萌芽的形態においてあらわれている。すなわち、このような批判は、リカードの経済理論、とくに労働価値説の武器を、逆にブルジョアジーに向けることによって行われたのである。

(1) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, S. 12—13長谷部文雄訳
(1) 七七—七九頁。

1

このようなプロレタリア経済学の先駆的形態は、とくに一八二〇年代のリカード派社会主義者の著作にみられる。だがそのまえに、近代社会主義の偉大な創始者の一人、ロバート・オーウエン (Robert Owen, 1771—1858) の経済思想をみ

ておきたい。オーウェンも経済学にかんずるかぎりではリカードに立脚しているが、彼の思想は多方面にわたっており、かつ彼の実践と分ちがたく結びついているので、それを理解するためには、どうしても彼の主要な活動をあわせてみてゆかねばならぬ。

産業革命期における異常な成功者の一人として、若くしてスコットランド最大のニューラナー紡績工場の「統治」者（一八〇〇年以降二十五年間）となったオーウェンは、労働者状態の徹底的改良によって、その性格改善に成功した。この実験にもとずいて体系化された彼の「性格形成論」は、一八一三——一四年の『社会にかんする新見解』（*A New View of Society, or Essays on the Principle of the Formation of the Human Character*）にのべられているが、その根本思想は性格形成における環境の重要視と環境改良による性格改善の可能性である。ここから彼の教育にかんする実践と主張とが生まれる。そしてその理論は彼の全思想の基礎となった。

だがオーウェンはもとより、これに止まらなかつた。労働者の奴隷状態からの解放のために、一八一五年彼は、幼児の使用禁止、十時間半労働日をふくむ、工場法案を議会に提出した。それは労働日の制限のための最初の試みの一つであった。

しかし一層重要なものは、一八一七年の恐慌の原因と救済

剰余価値説の成立過程(一) (松田)

策にかんする彼の建議である。ナポレオン戦争の終結はイギリスに恐慌をもたらした。その対策を考究するための委員会においては、オーウェンを除いて、たれひとり恐慌の眞の性質をあきらかにすることができなかった。彼はその報告書『工場貧民救済委員会への報告』(Report to the Committee of the Association for the Relief of the Manufacturing and Labouring Poor)において、現在の窮乏の直接原因は、機械の採用による人間労働の価値下落である。機械の採用は生産物の価値を引下げ、価格の低落にその需要を増加させた。かくして戦時の二十五年間生産力は躍進をつづけ、人口が十五倍ないし二十倍になったのとおなじ効果をもつに至った。

しかるに平和の到来とともに戦時需要がやみ、需要の減少のために供給の源泉を縮小せねばならなくなると、機械力が人間労働よりもはるかに安価なことが明かとなった。その結果機械力は引きつぎ使用されたが、人間労働は機械に代えられた。そして人間労働は、いまや人が通常の安楽さで生活するために絶対に必要なよりも、はるかに低い価格でえられるようになった。労働者階級はいまや機械力と競争する適当な手段をもたないことが明かとなった。それゆえ、(1)機械の使用が大いに減らされるか、(2)数百万の人間が飢えるか、さもなければ、(3)失業労働者のために有利な仕事をみつけ、その

労働に機械が現在のようにとつてかわるのではなく、補助として用いらねばならぬ、と。たれかオーウェン以前にかくも鮮かに機械の資本制的利用の結果を描き出したであろうか。また生産力の無制限の發展と制限された消費とのあいだの矛盾に恐慌の原因を見出すことができたであろうか。オーウェンの恐慌論はけつして過少消費説ではなく、むしろ事実上恐慌の基本的原因を、資本制生産様式の基本的矛盾である生産の社会的性質と占有の私的性質とのあいだの矛盾にもとめる見解に到達していたといつてよいであらう。なおオーウェンはこの報告のうちで、失業にたいする根本対策としてはじめその「協同村落」のプランを展開している。この報告は彼の共産主義への前進の旋回点となった。

だがオーウェンの協同社会の構想は、一八二〇年の『ラナーク州への報告』(Report to the County of Lanark)において一層明確となる。そしてこの書は、彼がその「経済思想を最も完全にのべている」ところのものである。彼はリカードの労働価値説にもとずいてその根本原理を立てている。「正しく指導された手の労働は、すべての富と国民の繁栄の源泉である。正しく指導されるとき、労働は労働者を充分安楽に維持するに必要な費用よりも、社会にとつてはるかに多くの価値をよむ」と。オーウェンの労働価値説はリカードのそれ

から出ているとはいへ、その階級的地盤を異にすることによつて、正反対のものに転化している。そのことは次の「人間労働本位制」(The Standard of Human Labour)についての議論によつてあきらかである。彼によれば貨幣はあらゆる害悪の根となつてゐるから、価値標準として金銀の代りに人間労働を採用すべきであるといふのである。「自然的価値標準は、主として人間労働である。あるいは、人間が活動させる手と頭脳の結合された力である。」「創造された新しい富のうちから、それを生産した労働者は公正な分けまえを受ける正当な権利がある。このことは自然的価値標準が現実の価値標準となることによつて、彼にたいして確定される。」「ともかくこれによつて事実上、労働者の剰餘価値搾取からの解放が目指されているのである。コールは本書が「社会主義的労働価値説を宣言」したといつてゐる。そこに剰餘価値説の萌芽を認めることはできないにしても、労働価値説をブルジョアジーの武器から、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの武器に転化したといつてよいであらう。なお本書において、オーウェンはその協同村落のプランを、もはやたんに失業対策としてではなく、社会変革の基本政策として掲唱してゐる。一般にサン・シモン (Claude Henri Saint-Simon, 1760—1825) / フォーエ (Charles Fourier, 1772—1837) / オ

「オーウェンとならべて三大空想社会主義者とよぶが、サン・シモンは大体において進歩的ブルジョアジーを代表し、フーリエには小ブルジョアの色彩がつよく、その「ファランステール」のうちに資本を認めている。これにたいしてオーウェンは、イギリスの経済的先進性によってであるが、生産手段の完全な共有を主張し、プロレタリアートの立場に立っているとおもわれる。「社会主義者」(Socialist)という名称が、はじめてオーウェン派の機関誌から生まれたといふことも偶然ではないであろう。『フナーク州への報告』は「オーウェニズムの最重要な論策」であり、「マルクスにたいして、彼の学説に重要な示唆をあたえた。」¹⁰⁾といわれている。

オーウェンのアメリカにおける共産村落の実験(ニュー・ハーモニー、一八二五年以降)は完全に失敗したが、オーウェニズムはイギリスの労働者階級のあいだに浸透し、解放運動の主潮となった。一八三二年の「全国衡平労働交換所」(National Equitable Labour Exchange) は、彼の労働本位制にもとずいて、多数の労働者協同組合を組織化し、三四年の「全国労働組合連合」(Grand National Consolidated Trade Union) は、オーウェンの旗の下に全国の労働組合を統合した。彼はこの労働組合と協同組合とによって資本主義社会を一朝にして変革することを夢見た。しかし労働交換所も労働

組合連合もまもなく崩壊した。そしてそれとともにオーウェンは労働運動からまったく手をひいた。

オーウェンの歴史的役割は一八三四年をもって終った。以後オーウェニズムは超階級的協同主義に墮し、彼の『新道徳世界の書』(The Book of the New Moral World, 7 Paris, 1836-44)は彼の信徒のバイブルとなった。しかし労働者階級の運動は前進をつづけて、チャーチストの大闘争となり、それを通じてオーウェニズムの精髓は、マルクス・エンゲルスによって批判的に攝取された。「イギリスにおける労働者の利益のためのすべての社会運動や現実の進歩が、すべてオーウェンの名にむすびついている」¹¹⁾ばかりでなく、彼は経済学史の上でも、社会主義経済学の最初の基礎をおいた人であったといつてよからう。

(2) R. Owen, *New View of Society*, Everyman's Library p. 156—8

(3) ローゼンムルグ直井武夫訳『経済学史二』三六二頁。

(4) Owen, *Ibid.* p. 246

(5) *Ibid.* p. 250

(6) *Ibid.* p. 262

(7) G. D. H. Cole, *A Short History of the British Workingclass Movement*, 林健太郎・河上民雄・嘉治元郎共訳『イギリス労働運動史I』九八頁。

- (8) M. Beer, The History of British Socialism, Vol. I, p. 187 加田哲二訳『英国社会主義史』二二三頁。
 (9) 五島茂『ロバート・オウエン著作史』一〇四頁。
 (10) コール前掲書訳九八頁。
 (11) F. Engels, Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft, 邦訳『マルクス・エンゲルス二卷選集』第二卷九六頁。

2

「一八二〇年代にリカードの価値理論および剰余価値理論を、資本制生産に抗するプロレタリアートのために逆用し、ブルジョアジーと闘うにブルジョアジー自身の武器をもって¹²⁾し」たところの、リカード派社会主義者は、チャールス・ホール(Charles Hall, 1740?—1820?)を先駆者とし、タムソン、グレイ、ホジスキ、エドモンズらを中心とし、ジョン・ブレイを最後とする一団の人々であった。だが彼らのあいだには、タムソンらのオーウェンの社会主義者と、ホジスキンらの反資本主義的経済学者との二つの流れがあった。まず前者からみてゆくことにしよう。

これらの人々はベントタムの功利主義を哲学的基礎とし、オーウェン流の協同社会の樹立を目標としていた。その代表者ウィリアム・タムソン(William Thompson, 1783—1833)はベントタム主義者として出発し、オーウェンの主張に共鳴する

に至ったのであって、一八二四年に著者『人類の幸福にとつて最善の富の分配の原理の研究』(An Inquiry into the Principles of Distribution of Wealth, most Conducive to Human Happiness)を著した。その説くところは、現代社会の矛盾は富の生産の増大にもかかわらず、それが社会の一部のものに専有されて、大多数のものは富の欠乏に苦しんでいるところにある。それゆえ経済学は「富の科学」ではなく、「人類の幸福を促進する科学」でなければならず、富の生産ではなくて富の分配を、すなわち「最大可能なる人類の幸福、いいかえれば最大多数の最大幸福を促進する」分配の体制を追求せねばならぬ。そこで彼は古典経済学の労働価値説に立脚して、「労働のみが富の生みの親」であり、価値の尺度であるとなし、しかも現実においては資本にたいする報酬、すなわち利潤が労働生産物から控除されているという。彼は資本家の評価にしたがえば資本も富を生産しようがゆえに、それに報酬すなわち利潤が支払われるのは正当であるとすると、しかしもしこのような評価が一般的となれば、社会に甚だしい不平等が起り、人類の幸福は最低水準まで低下するであろうから、労働者の評価が一般に行われねばならぬ、すなわち労働者は自己の労働の全生産物を自己の手に収めねばならぬと主張する。したがってタムソンの剰余価値論は理論的ではな

く、いちじろしく倫理的批判の色彩が濃厚である。さて彼は富から最大の幸福をつくり出すためには、この労働全収権とともに、労働と交換の自由が必要であるとして、これらの原理がもつともよく実現される社会として、当初小生産者を主体とする社会を描いていたようであるが、二十七年に著した『労働報酬論』(Labour Rewarded)では、ホジスキンの自由競争体制に反対して、平等と安全とを共に確保する唯一の途は、各人の自由意志による協同社会であると主張するに至った。

タムソンと同様に労働価値説にもとづいて協同社会主義を主張したもののハバ、ジョン・グレイ(John Gray, 1799—1883)である。彼が『人類の幸福にかんする講義』(A Lecture on Human Happiness, 1825)および『社会制度論』(The Social System, 1831)を著し、貧者の犠牲性において富者の存在する社会の矛盾を指摘し、等価交換の確保される社会を構想した。彼はその手段として通貨改革を主張し、オーウェンの思想を継承して、「労働貨幣」の理論を展開した。

タムソンらの流れを汲むものにはなおエドモンズ(Thomas Rowe Edmonds, 1803—83)——著書『実践的・道徳的・政治的・経済学』(Practical, Moral, and Political Economy, or the Government, Religion and Institutions most conducive to Individual Happiness and to National Power, 1828)——

およびジョン・ブレイ(John Francis Bray)——著書『労働〔者〕の苦悩と労働〔者〕の救済』(Labour's Wrong and Labour's Remedy, or, The Age of Might and The Age of Right, 1839)——などがある。ブレイの『労働〔者〕の苦悩』は「オーウェン主義の最後のまともな力強い宣言」であると知られているのである。¹⁴⁾

(12) F. Engels, Vorwort zum 'Das Kapital', Bd. II, S. 13 訳(5)二三頁。

(13) タムソンの『分配論』のなかには Surplus Value ということがみられるが、それは剰余価値とは違った意味でしかわかってゐる。

(14) M. Beer, The History of British Socialism, Vol. I, p. 236 訳二七九頁。

この書物にはつぎのような剰余価値思想をあらわす注目すべきことがみられる。「労働者たちは半年だけの価値とひきかえに、まる一年の労働を資本家たちにわたしてきた。……この取引は多くの場合合法的ではあるが鉄面皮な窃盗にほかならぬ。」(K. Marx, Misère de la philosophie: 『哲学の貧困』『選集』第一卷三二二—三頁)

いま一つの流れをなす資本主義批判者たちの最初のものは、マルクスが大英博物館の書物の山のなかから発見したパンフレット『国民的苦難の根源および救済策 マッセル卿への手紙』(The Source and Remedy of the National Difficulties etc.

A Letter to Lord John Russell, 1821)の匿名の著者である。

マルクスによれば彼はリカードにくらべて一つの本質的進歩をとけている。彼は剰余価値、彼の用語にしたがえば「利子」(interest)を剰余労働、すなわち労働者が労働力の価値を代置するところの、または労賃にたいする等価を生産するだけの労働量を超えてなすところの労働に帰せしめている。価値を労働に帰せしめることが重要であると同様に、剰余価値を剰余労働に帰せしめることは重要である、とされている。¹⁵⁾

この著者はつぎのようにいっているのである。「もし労働者がパンの代りに馬鈴薯で生きてゆくとともに追いつめられてしまう場合には、彼の労働からより多くのものが要求されることはなんら疑いがない。いいかえれば、労働者がパンで生きていたあいだは、彼自身およびその家族を養ってゆくために、月曜日と木曜日との労働を費さねばならなかったのに、馬鈴薯で生きてゆくときには月曜日の半分だけを自分のものとして、月曜日の他の半分と木曜日の全部とは、国家または資本家のための労働に使われるのである。」「資本家に支払われた利子は、それが地代、貨幣利子、または企業者の利潤のいずれの形態をとるかを問わず、他人の労働から支払われるのであるということが認められる。」¹⁶⁾と、このように彼は剰余価値を剰余労働に帰し、この剰余価値の一般的形態をそ

の特殊形態から区別している。しかし剰余価値をその特殊な一形態の名称である利子と名づけたことは、彼が既存の経済学的範疇に囚われていたことを示している。彼はさらにつぎのように主張している。資本にたいしてなんらの利子も支払われないとき、はじめその国は真に富んでいるのである。すなわち「十二時間ではなく六時間働くときである。富とは人々の自由にしうる時間以外のなものでもない。」¹⁷⁾と、これはまことにすぐれた思想であり、マルクスの根本理念に通ずる考え方である。彼の著作はここで問題にしている人々(リカード派社会主義者)の著書のうちで、もっとも早いものであるが、剰余価値の把握の点ではもっともすぐれたものである。

つぎにレヴンストーン(Placy Ravenstone)の『減債基金とその影響にかんする考察』(Thoughts on the Founding System and its Effects, 1824)がある。彼によれば、資本は他人の労働にたいする支配であり、それが剰余生産物にたいする請求権をあたえるのである。¹⁸⁾

彼らのうちでもっとも著名なのは、トーマス・ホヅスキン(Thomas Hodgskin, 1787—1869)である。彼のその理論の基礎を功利主義ではなく自然権におき、ロックの自然法思想を新しく復活させた。彼は社会の病根が自然権——労働者が

自己の労働の全生産物を所有する権利はその主要な内容である——が財産の人為権によって犯されているところにあるとし、この自然権を基礎とする社会問題の解決を考えた。すなわち、彼はその著『労働擁護論』(Labour Defended against the Claims of Capital: on the Unproductiveness of Capital proved with Reference to the present Combinations against Journeymen, 1825) 『民衆の経済学』(Popular Political Economy, Four Lectures delivered at the London Mechanics' Institution, 1827)、『自然権と人為権』(The Natural and Artificial Rights of Property contrasted, 1832)において、ミス・リカード以来の労働価値説から出発して、「資本の不生産性」を証明しようとしたのである。彼の説くところによれば、すべての富は労働の生産物であり、資本も元来労働の生産物に他ならないので、経済学者たちのように資本が富の生産者であると主張するのは誤りである。まず流動資本、すなわち労働者の食物と衣服について考えれば、これによって労働者の生活が支えられ、生産が可能となると主張されているが、実はその生活を支えているものは「共存労働」(co-existing labour) すなわち同時に働いている他の労働者たちの労働に他ならない。ときに固定資本についてのみ、道具や機械の使用によって労働の生産力が増大するが、しかしそれは

労働者の労働が加えられないかぎりなものをも生産しない。したがって資本は不生産的であり、労働の生産物はすべて労働者の所有に帰すべきである。しかるに資本にたいして多額の利潤が支払われ、しかもそれが複利をもつて増大するところに労働者の貧困の原因がある。²⁰⁾「資本とは……他の人々を丸裸にさせる人々によって、彼らを剝奪する手を隠すために發明されている一種の神秘的なことばである。」²¹⁾労働のみが生産的であり、資本は不生産的である！ 古典経済学の労働価値説はここにその必然の帰結を見出した。ブルジョアジーの武器はプロレタリアートによってブルジョアジー自身の胸につきつけられたのである。もっともホジスキンは分配の問題、すなわち労働の報酬の決定はこれを自由競争に委ねようと考えていたのであって、「けっして社会主義者ではなかった。」²²⁾

(15) K. Marx, *Theorien über den Mehrwert*, Bd. III, S. 281

訳『全集』第一卷 二八六—七頁。

(16) *Ibid.*, S. 282—3. 訳二八八頁。

(17) *Ibid.*, S. 302 訳三〇六頁。

(18) *Ibid.*, S. 303 訳三〇七頁。

(19) *Ibid.*, S. 309 訳三一三頁。

(20) T. Hodgskin, *Labour Defended against the Claims of Capital*, The Workers' Library, 1922 p. 35, 38, 52 鈴木

鴻一郎『労働擁護論』(古典文庫)二九、三一、四二頁。

(21) Ibid. p. 60 訳四八頁。

(22) Peir, British Socialism, Vol. I, p. 266 訳三二二頁。

以上の二つの流れのうちで、経済学史にとって一層重要なのは後の方の人々である。なぜなら、前の社会主義者たちの学説には剰余価値の搾取にたいする倫理的批判の色彩がつよいのにたいして、後の反資本主義的経済学者たちの方は、あるいは剰余価値の源泉の把握において、あるいは資本の生産性の証明において、理論的により一層明確であるからである。マルクスがその一八五〇年代の研究によって彼の剰余価値論を形成するさいに一つの手がかりとなったものは、これら三人の著作であったと思われる。²³⁾したがってアントン・メングァーが、「マルクスはタムソンの著書から直接彼の見解をえている。」²⁴⁾などというのはまったく見当ちがいであろう。

つぎに、これらの人々はリカード理論の矛盾、すなわち一方において、「労働は交換価値の唯一の源泉であり、使用価値の能動的創造者である。」と論じながら、しかも他方において、「資本がすべてである。労働者は無か、または資本の生産費の一部にすぎない。」ということの矛盾を指摘し、「資本は労働者の搾取以外のなものでもない。労働こそはすべてである。」ことを主張したのであった。それは「リカード

の見地にたち、彼自身の前提の基礎のうえにおいて、プロレタリアの利益を代表するものの最後のことば」²⁵⁾だったのである。それゆえリカード派社会主義者をたんに「小生産者」を代表するものとみなす見解には賛成しえない。

(23) 周知のように、『剰余価値学説史』第三巻第三章「経済学者にたいするリカード説を基礎とする反対」は、パンフレット『国民的苦難の根源および救済策』作者、レンヌストーン、ホジスキンの三人を論じている。

(24) Anton Menger, Das Recht auf den vollen Arbeitsersatz, 1886, 森戸辰男訳『全労働収益権史論』(『社会思想全集』)六六頁。

(25) Marx, Theorien, Pt. III, S. 309 訳三二二頁。

(26) 隅谷三喜男「リカード派社会主義序説」舞田教授遺暦記念論文集『古典学派の生成と展開』二六六—二七頁。

3

大陸において、リカード経済学から社会主義的帰結をみちびきだしたものに、フランスのブルードンとプロシヤのロードベルッスがある。

ブルードン (Pierre Joseph Proudhon, 1809—65) は典型的な小ブルジョア社会主義者であった。「財産とは盗奪である。」と喝破した『財産とはなににか』(Justice que la propriété? 1839) はマルクスの賞讃をえたが、『経済的矛盾の体系』あ

るいは貧困の哲学』(Système des contradictions économiques, ou la philosophie de la misère, 1846) に展開された彼の経済理論は、『哲学の貧困』(Misère de la philosophie, Réponse à la Philosophie de la misère de M. Proudhon, 1847)に於いてマルクスの痛烈な批判を蒙った。ブルードンは、リカードの述べた労働価値法則すなわち労働時間による価値の決定から、諸商品が現実においても、その価値どおりに交換されねばならぬという結論をみちびきだす。さらに労働の価値とその労働の生産する価値とは相等しくなければならぬとする。現実におけるこの均衡の攪乱とそれから生ずる一さいの弊害とは、すべて私的交換とその産物である貨幣によってひきおこされたものである。そこでブルードンは労働時間を表示する労働貨幣を發行する人民銀行の創設を主張した。それは資本主義社会の基礎をそのままにしながら、その害悪をとりのぞこうとする小ブルジョアの空想であった。²⁷⁾

④ レーニンはブルードンの見解のつぎのようなあますところのない総括をあたえている。「資本主義とその基礎である商品生産を廃棄しないで、この基礎から悪用や贅肉など切りとること、交換と交換価値を廃棄しないで、反対にそれを「構成」しそれを一般的な、絶対的な、変動や恐慌や悪用のない公正なものにすること——これがブルードンの思想である。」と。(ローゼンベルグ・ブリ

・レーニン『経済学史』下巻五二七—二八頁)

ローゼンベルグ (Johann Karl Rodolbertus, 1805—75) ⁴⁾

『国家経済の現状認識のために』(Zur Erkenntnis unserer staatswirtschaftlichen Zustände, 1842) 『地代論』(Widerlegung der Ricardoschen Lehre von dem Grundrente und Begründung einer neuen Rententheorie, Dritter Brief an von Kirchmann, 1851) 『資本』(Das Kapital, Vierter sozialer Brief an von Kirchmann, 1885)等の著作において古典学派的労働価値説を發展させることによって、独特の剰余価値説に到達した。彼によれば、すべての経済財は労働のみを費用とするが、しかも労働生産物は労働者にのみ帰属せず、その一部は労働によってではなく所有権に基づいて取得されるところの「賃子」(Rente)となる。すなわちローゼンベルグは剰余価値一般を「賃子」という名称によって把握したのである。さらに彼は、工業生産物には農業生産物にはないところの「材料価値」が含まれ、したがって賃子率は工業資本の方が農業資本より低いために、この超過分が地代となると考えて、はじめて「絶対地代」を認識した。しかしローゼンベルグの剰余価値論は、その本質において、リカード派社会主義のそれを出ていない。彼も剰余価値をその特殊の一形態の名称でよび、またそれを全資本制生産の鍵としないで、むしろユートピアの基

礎たらしめたからである。²⁸⁾そして彼はこの改革をプロシヤ国家に求めたのである。ロートベルツスの経済学説は学説史上マルクス経済学にもっとも近いものではあるが、²⁹⁾社会主義経済学成立の本流とは無交渉であり、マルクスの剰余価値論は彼とはまったく別箇に生誕したのである。³⁰⁾

28) Engels, Vorwort zum 'Das Kapital', Bd. II, S. 13 訳(5)二二頁。

29) 平瀬巳之吉氏は、ロートベルツスの経済学を、古典経済学とマルクス経済学とをむすぶ「中間の環の最大のもの」、「客観的には」マルクス経済学に「最も親近と類縁とを示すものである。」と評価されている。(平瀬巳之吉『古典経済学の解体と発展』一頁)

30) エンゲルスは、マルクスの剰余価値論がロートベルツスからの剽竊であるという中傷に答えて、マルクスが彼自身の経済学批判を完成した一八五九年頃までロートベルツスをまったく知らなかったこと、しかも一八四七年頃には剰余価値がどこから、またいかにして生ずるかをきわめてよく知っていたことをあげている。(Engels, *ibid.*, S. 8 訳一五頁)

(未完)

「マルクス剰余価値論の生成」にかんする続稿は、次号

『マルクス記念論文特集』に掲載の予定。